

さらに、タミル語には日本語の「トイウ」に相当する補文標識 *enra* を伴った補文節 (complement clause) もみられる。このタイプの名詞修飾節は先述の連体修飾節と異なり節内に時制や人称・性・数を表す接辞を伴った定動詞を用いる。補文標識を用いて (2) を表すと次の (3) のようになる。

- (3) [*tiruṭaṇ varu-kir-aan enra*] *paya-tt-aal*
 thief come-PRS-3SG.M COMP fear-OBL-INST
 ‘for fear that a thief would come’

(Lehmann 1993: 329 より発表者一部改変)

本発表は外の関係の名詞修飾節においてこの補文標識 *enra* が生起する条件についてコーパス調査から得られた結果を示す。

1. 先行研究と問題提起

Lehmann (1993: 329) によると、補文標識 *enra* は、節内に欠如動詞⁴が含まれたり、修飾節が常に疑問形をとる *keelvi* ‘question’ や *canteekam* ‘doubt’ などの名詞を修飾したりする場合には義務的に用いられるが、その他の場合には補文標識を介さずに連体修飾節で名詞を修飾してもよいという (2), (3)。

さらに、*cattam* ‘sound’ や *naararam* ‘smell’, *uṇarcci* ‘feeling’ などの知覚を表す名詞を修飾する際にはこの補文標識 *enra* を介して名詞修飾節を形成することはできないという (4)。

- (4) a. [*aṅkee yaar-oo iru-kkir-a*] *cattam keeṭ-ṭ-atu*
 there who-INDF be-PRS-ATTR sound hear-PST-3SG.N
 b. *[*aṅkee yaar-oo iru-kkir-aarkaḷ enra*] *cattam keeṭ-ṭ-atu*
 there who-INDF be-PRS-3PL COMP sound hear-PST-3SG.N
 ‘The sound that someone was there was heard’

(Lehmann 1993: 329 より発表者一部改変)

Rajendran (2016: 144) によると、名詞修飾節に補文標識 *enra* が現れるのは被修飾名詞が *ceyti* ‘news’ や *viṣayam* ‘matter’, *karuttu* ‘opinion’, *uṇmai* ‘truth’ といった抽象名詞のときであるという。

以上の記述をまとめると次ページの表 1 のようになる。

先行研究では、[1] 被修飾名詞の意味的特徴と [2] 節内の形式についての言及はあるが、それらを定量的に調査したものはない。そこで、本発表ではコーパスを用いて補文標識 *enra* の生起の条件を定量的に調査し、より広い一般化を目指す。

⁴ タミル語の動詞はふつう語幹に時制や人称・性・数を表す接辞を伴うが、一部の動詞は時制の接辞をとらないものがある。このような動詞を欠如動詞 (defective verb) といい、次のような動詞が含まれる: *kiṭai* ‘be not, exist not’, *uḷ* ‘be, exist’, *il* ‘be not, exist not’, etc.

表 1: 先行研究における補文標識 *enra* の生起条件

	必須	任意	不可
Lehmann (1993)	・ 節内に欠如動詞を含む ・ 疑問節をとる名詞	・ 抽象名詞	・ 知覚名詞
Rajendran (2016)	記述なし	・ 抽象名詞	記述なし

(Lehmann 1993, Rajendran 2016 をもとに発表者作成)

2. 調査

2.1 節で調査方法について、2.2 節で調査結果について扱う。

2.1. 調査方法

本調査では、次の4つの名詞を被修飾名詞とする名詞修飾節を調査を行った: *ceyti* ‘news’ 「発話性」, *ennam* ‘thought’ 「思考性」, *cattam* ‘sound’ 「感覚性」, *pinnar* ‘after’ 「相対性」。これらの名詞はそれぞれ寺村 (1992) で日本語の「トイウ」の介在の可否に関わる「」内のような意味的特徴を持つとされる名詞である。

使用するコーパスは Tamil Web 2021 (taTenTen21) である。収録語数は約 8 億 2,000 万語で、2021 年にタミル語で書かれたウェブサイトおよびタミル語版 Wikipedia から収集した文で構成されている。検索方法は “Concordance” 検索の “Advanced” を用い, “Corpus Query Language (CQL)” に以下の検索式 [i] と [ii] をそれぞれ入力して検索を行った。なお、実際上の問題から、本調査では 15 語以内で構成される文のみを対象とした。

[i] 補文節

```
[tag="VERB|AUX"][]{}{0,0}[word="என்ற"][]{}{0,0}[word="target noun5"]within<s>[]{}{0,15}</s>
```

[ii] 連体修飾節

```
[word="*நத"][]{}{0,0}[word="target noun"]within<s>[]{}{0,15}</s>
```

Filter: [tag="DET"] (Range: “Token” KWIC)

まず、対象の名詞が補文節を伴うかどうかを以下の手順で調査する: 【手順 1】 ①検索式 [i] を Sketch Engine 上で taTenTen2021 の “Concordance” 検索ボックスに入力し, ②得られた *ceyti* ‘news’ 3,051 例, *ennam* ‘thought’ 13,519 例, *cattam* ‘sound’ 54 例, *pinnar* ‘after’ 66 例から、前者 2 つはランダムに上位 50 例, 後者 2 つは全ての用例を調査対象とした。なお、補文節を含まない例や重複している例は手作業で取り除いた。

次に、【手順 1】の調査結果を踏まえ、補文節で修飾することができた名詞 *ceyti* ‘news’ と *ennam* ‘thought’ が連体修飾節によっても修飾されるかどうかを以下の手順で調査する: 【手

⁵ ここに対象の名詞を入力する: *செய்தி* *ceyti* ‘news’, *எண்ணம்* *ennam* ‘thought’, *சத்தம்* *cattam* ‘sound’, *பின்னர்* *pinnar* ‘after’.

順 2】①検索式 [ii] を Sketch Engine 上で taTenTen2021 の “Concordance” 検索ボックスに入力し、②類似した別形式を排除するために Filter: [tag=’DET’] (Range: “Token” KWIC) をかける。③その結果得られた *ceyti* ‘news’ 5,715 例と *eṇṇam* ‘thought’ 520 例からそれぞれランダムに上位 50 例抽出し、【手順 1】で得られた補文節と比較する。

2.2. 調査結果

まず、*cattam* ‘sound’ は 54 例のうち 9 例、*pinṇar* ‘after’ は 66 例のうち 3 例が補文節によって修飾されていた。前者のうちほとんどは補文標識 *eṇṇa* の前にオノマトペを伴ったもの、後者のうちほとんどは補文標識 *eṇṇa* の前に別の名詞を単独で伴ったものであり、いずれも補文節とは判断できないものであった。さらに、*cattam* ‘sound’ を修飾していた補文節は全て「音」ではなく「声」の意味として用いられており、節内は「発話内容」を表していた (5)。

- (5) [*naaṇ iru-kkiṛ-eeṇ eṇṇa*] *cattam avarkaḷ-ukku-k keeṭṭu-k-koṇṭ-ee iru-kka-veeṇṭum*
 1SG.NOM be-PRS-1SG COMP voice 3PL.DIST-DAT hear-PROG-EUPH be-INF-want
 ‘The voice saying “I am here” must continue to be heard by them’
 [thinnai.com]

したがって、「感覚性」の名詞は補文標識の介在が不可能で、外の関係の名詞修飾節は補文標識を伴わない名詞修飾節、すなわち、連体修飾節で表すといえる (6)。

- (6) [*tarai-y-il cappaattu atir-nt-a*] *cattam irav-iṇ nicaptatt-ai-k*
 ground-LOC shoes shake-PST-ATTR sound night-GEN silence.OBL-ACC
kizi-tt-atu
 tear-PST-3SG.N
 ‘The sound of shoes shaking the ground tore the silence of the night’
 [selvakumaran.com]

(7) は僅かながらみられた *pinṇar* ‘after’ 「相対性」が補文節を伴う例である。

- (7) *uṅkaḷ-ukku-t teriyum [puli-kaḷ illai eṇṇa] pinṇar uṭaṇaṭi-y-aaka-v-ee ellaam*
 2PL-DAT know tiger-PL NEG COMP after immediately-ADVZ-EUPH all
talai-kiiṭ-aak-iṇ-a eṇ-p-at-ai
 top-bottom-become-PST-ATTR say-FUT-3SG.N-ACC
 ‘You know that everything turned upside down immediately after the tigers were gone’
 [yarl.com]

ceyti ‘news’ と *eṇṇam* ‘thought’ は補文節を伴った例がそれぞれ 50 例得られた (8), (9)。

- (8) [*anpazakan uyir-iza-nt-aar enra*] *ceyti miku-nt-a*
 PN life-lose-PST-3SG.HON COMP news surpass-PST-ATTR
varuttam-aḷi-kkir-atu
 pain-become-PRS-3SG.N
 ‘The news that Anbazhagan died brings great pain’

[navaiman.com]

- (9) [*et-il-um verri per-a veṇṭum enra*] *eṇṇam toonr-um*
 which-LOC-CUM success get-INF want COMP thought come.to.mind.INF-FUT
 ‘The thought that [we] must succeed in everything comes to mind’

[paasam.com]

以上のことから、Lehmann (1993) が指摘するように、タミル語では知覚名詞、すなわち「感覚性」の意味的特徴を持った名詞のみ補文標識の介在を許容しないことがわかる。

次に、補文節内の定動詞の形式に着目して分析したのが表 2 である。表中の「欠如動詞」は一般的な動詞が伴う時制や人称・性・数を表す接辞を伴わない動詞を、ほかのスモール・キャピタルは動詞の形式を示す⁶。「その他」は動詞を含まない節、すなわち名詞述語文などを指す。表 2 からわかるように、補文節内の定動詞は欠如動詞が最も多く (29.1%)、過去形 (22.7%)、現在形 (14.5%)、そして否定形 (10.9%) がそれに続いている。

表 2: 補文標識を含む名詞修飾節内にみられた定動詞の形式

	‘news’		‘thought’		‘sound’		‘after’		合計	
欠如動詞	1	2.0%	30	60.0%	1	14.3%	0	0.0%	32	29.1%
PST	24	48.0%	1	2.0%	0	0.0%	0	0.0%	25	22.7%
PRS	12	24.0%	3	6.0%	1	14.3%	0	0.0%	16	14.5%
NEG	6	12.0%	1	2.0%	2	28.6%	3	100.0%	12	10.9%
FUT	3	6.0%	3	6.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	5.5%
IMP	2	4.0%	1	2.0%	3	42.9%	0	0.0%	6	5.5%
IMP.NEG	0	0.0%	2	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.8%
DOUBT	0	0.0%	2	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.8%
ATTR.FUT	0	0.0%	2	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.8%
NMLZ	0	0.0%	2	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.8%
その他	2	4.0%	3	6.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	4.5%
合計	50	100.0%	50	100.0%	7	100.0%	3	100.0%	110	100.0%

⁶ タミル語は命令形と否定形に時制の標示がない (Lehmann 1993: 54, 68).

表3は表2の結果を補文節内の定動詞に着目して「時制接辞なし/時制以外の接辞を含む」と「時制接辞のみ」で分類したものである。

表3: 時制接辞の有無による補文節内の定動詞

時制接辞なし/時制以外の接辞を含む	56	53.3%
時制接辞のみ	49	46.7%
合計	105	100.0%

表3のように、補文節内の定動詞のうち半分以上が「時制接辞なし/時制以外の接辞を含む節」であった。このことから、タミル語において補文節は欠如動詞などの時制のない動詞形や時制以外の接辞も同時に伴った動詞形を節内で用いる傾向があることが示唆される⁷。連体修飾節内では非定動詞が求められるため、欠如動詞や命令形、否定形などを用いることができず、結果として定動詞を節内に用いることができる補文節が選択される。このことは表1のLehmann (1993)の主張を部分的に支持するものであるが、Lehmann (1993)が示した条件にはさらなる一般化の余地があることも示唆する。

次の例は *ceyti* ‘news’ が補文節によって修飾される場合 (10) と連体修飾節によって修飾される場合 (11) である。

- (10) *itu-v-ee [jakaat vazaṅka veṅṅuṁ eṅra] ceyti saḥiḥaṅat-aaka iru-kka*
 this-EUPH Zakat distribute.INF want COMP news true-ADVZ be-INF
vaaypp-illai eṅra nam nilaipatt-ai meelum urutippattut-tu-kir-atu
 chance-NEG COMP 1PL.NOM.INCL state.OBL-ACC moreover confirm-PRS-3SG.N
 ‘This further confirms our position that the news that Zakat must be distributed is unlikely to be credible’
 [islamkalvi.com]

- (11) [*aar eṅkaḷ viiṭṭu-kku va-nt-a] ceyti koḥump-il parava-t*
 who 1PL.EXCL house.OBL-DAT come-PST-ATTR news Colombo-LOC spread-INF
toṭaṅk-iy-atu
 begin-PST-3SG.N
 ‘The news about who came to our house began to spread in Colombo’
 [hubtamil.com]

⁷ 但し、主節における定動詞の形式については改めて調査する必要があり、主節と比べて有意差があるかどうかについては現時点では不明である。

一方, *enṇam* ‘thought’ は【手順 2】で得られた結果 520 例からランダムに抽出した 50 例のうち外の関係の名詞修飾節と判断できるものは一例もなかった。このことから, 外関係の名詞修飾節が *enṇam* ‘thought’ を修飾する際は義務的に補文標識を要求するといえる⁸。

3. 分析・考察

2 節の調査結果をまとめると, 「感覚性」の名詞である知覚名詞のみ補文節による修飾ができない一方, 「思考性」の名詞である *enṇam* ‘thought’ は補文標識が必須であるといえる。連体修飾節ではなく補文節を用いる動機は, 補文標識が介在することで節内に定動詞を用いることができ, 欠如動詞などの時制や人称などを示さない動詞形を使用することができることにある。時制以外の接辞を動詞に付加したい場合も同様のことがいえる。以上をまとめると次の表 4 のようになる。

表 4: 補文標識の生起条件

	必須	任意	不可
被修飾名詞の意味的特徴	・ <i>enṇam</i> ‘thought’ - 欠如動詞	・ ほとんどの名詞	・ 知覚名詞
名詞修飾節内の定動詞の形式	- 時制のない動詞 - 時制以外の接辞も伴った動詞	記述なし	記述なし

4. おわりに

本発表では, タミル語の名詞修飾節における補文標識の生起条件についてコーパスを用いて定量的な調査を行った。結論として, [1] 被修飾名詞の意味的特徴と [2] 節内の定動詞の形式の 2 点が補文標識の生起に関わることを指摘した。まず, [1] 被修飾名詞の意味的特徴について, 「感覚性」の意味的特徴をもついわゆる知覚名詞は補文標識の介在を許さない。一方, 「思考性」の意味特徴をもつ *enṇam* ‘thought’ は補文標識の介在が義務的であった。次に, [2] 節内の定動詞の形式について, 欠如動詞, 時制のない動詞, 時制以外の接辞を伴った動詞を節内に用いるために補文節が用いられる。

今後の課題として, 対象とする被修飾名詞の種類を増やすことが挙げられる。今回の調査範囲では被修飾名詞に関わる条件がその語固有の特徴によるものなのか広く意味的特徴によるものなのかを判別できない。そのため, 今後は対象とする被修飾名詞の種類を増やして補文標識の介在の可否を調査する必要がある。

⁸ しかしながら, この結果だけではタミル語において「思考性」の名詞が義務的に補文標識を要求するとはいえず, 実際に Kobayashi (2025) では「思考性」の名詞 *ninaippu* ‘thought’ が補文標識のない外関係の名詞修飾節によって修飾する例もみられる。これは「感覚性」の名詞についても同様のことがいえるが, 本発表では Lehmann (1993) の主張を支持する。

略号一覧

1	first person	EXCL	exclusive	NEG	negative
2	second person	FUT	future	NOM	nominative
3	third person	GEN	genitive	OBL	oblique
ACC	accusative	HON	honorific	PL	plural
ADVZ	adverbializer	INCL	inclusive	PN	proper noun
ATTR	attributivizer	INDF	indefinite	PROG	progressive
COMP	complementizer	INF	infinitive	PRS	present
CUM	cumulative	INST	instrumental	PST	past
DAT	dative	LOC	locative	SG	singular
DIST	distal	M	masculine		
EUPH	euphonic	N	neuter		

参考文献

- Comrie, Bernard (1998) Attributive Clauses in Asian Languages: Towards an Areal Typology. In Winfried Boeder, Christoph Schroeder, Karl Heinz Wagner, and Wolfgang Wildgen (eds.), *Sprache in Raum und Zeit, In memoriam Johannes Bechert* [Language in Space and Time: In Memoriam Johannes Bechert]. Band 2, 51–60. Tübingen: Gunter Narr.
- Kobayashi, Hayato (2025) Constraints on Head Nouns of Attributive Clauses in Tamil. Unpublished master's thesis, Tokyo University of Foreign Studies.
- Lehmann, Thomas (1993) *A Grammar of Modern Tamil*. Second Edition. Pondicherry: Pondicherry Institute of Linguistics and Culture.
- Rajendran, Sankaravelayuthan (2016) Noun Modifying Expressions in Tamil. In *Language in India* 16 (4): 114–154.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集I 一日本語文法編一』 東京: くろしお出版.

コーパス

Tamil Web 2021 (taTenTen21). https://app.sketchengine.eu/#dashboard?corpname=preloaded%2Ftatenten21_rft. [最終閲覧日: 2025年3月21日].